



石川倉次とその時代

～点字がつなぐ過去と未来～

監修 高橋 實

石川倉次生誕150年記念エッセイ

点字から教えられたこと	池田 瑛
点字から教えられたこと	宇野 繁博
点字から教えられたこと	江川 稔
私の点字の覚え方・習い方	坂本 高広
点字から教えられたこと	白石 優子
点字に生きる	田辺 美起
点字に生きる	長尾 榮一
点字から教えられたこと	額賀 孝子
点字に生きる	福井 宏郷
点字に生きる～私と点字～	松倉 ひで
点字から教えられたこと	安田 洋子
点字の未来を想像する	米倉 美智子
点字に生きる	与野 福三
初期盲教育の周辺と石川倉次	阿佐 博

KGS のブレイルファミリーシリーズ

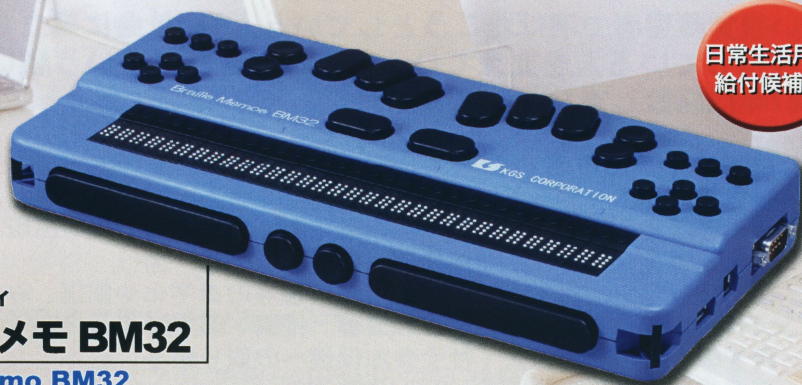
日常生活用具
給付候補品

NEW

点字ディスプレイ

ブレイルメモ BM32

Braille Memo BM32



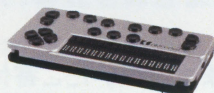
視覚障害者の社会参加（就学・就労）のサポート

「ブレイルメモ BM32」登場

これからも続々と開発される
KGS の新製品・新技術にご期待ください。

KGS のブレイルファミリー製品はすべて安心の5年保証です。

日常生活用具
給付候補品



ブレイルメモ ポケット

Braille Memo Pocket

日常生活用具
給付候補品



ブレイルテンダー BT46

Braille Tender BT46

日常生活用具
給付候補品



ブレイルメモ BM24

Braille Memo BM24

日常生活用具
給付候補品

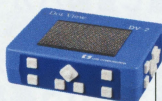


ブレイルメモ BM46

Braille Memo BM46

ドットビュー DV-2

Dot View DV-2



点字ラベラー BL-1000

Braille Labeler BL-1000



※「日常生活用具給付候補品」について、詳しくはお住まいの自治体へお問い合わせください。

ケージーエス株式会社
KGS CORPORATION

〒355-0321 埼玉県比企郡小川町小川1004

FAX 0493-72-7337

お問い合わせ先 ☎ **0493-72-7311** (代)

E-mail info@kgs-jpn.co.jp

URL <http://www.kgs-jpn.co.jp>

視覚障害者支援総合センターとは

若い視覚障害者で羽ばたこうとしている人や、社会に巣立ち躍進を目指している人を支えていくことができればという願いから1987年に開設しました。

主な事業

1. 視覚障害者に対する各種情報提供支援（社会人・学生対象）
 - ・一般図書・雑誌、参考書、実用書等の点字図書の製版や出版
 - ・月刊『視覚障害——その研究と情報』の編集・発行
2. 視覚障害学生に対する学習支援（学術書等の点字化や朗読、みずほ・メイスン・聖明・朝日奨学生の公募・推薦・運営）
3. 視覚障害者の職域拡大・社会参加促進への取り組み
 - ・視覚障害者授産施設チャレンジの運営
 - ・国家公務員など資格試験の各種問題集、学術専門書の点字出版
 - ・視覚障害音楽家の社会参加促進、コンサート開催など
4. 若い視覚障害男女を奨励（2003年創設）
 - ・「チャレンジ賞」「サフラン賞」制度の運営
5. ボランティアの養成と組織化
 - ・点訳者養成講座の開催と点字通信教育の実施
6. 活字出版および社会啓発・広報活動の実施
7. 視覚障害に関わる職業・教育・福祉・文化の調査研究
8. 点訳・音訳等の受託
 - ・点字教科書製作、点字名刺、自治体等の各種広報誌の点字版・音声版の製作など

当センターでは、事業運営を支えるために皆様のご協力、ご支援を広くお願いしております。

1. 視覚障害者を支援していくための寄付を募っています。頂いたご寄付は当センターが取り組んでいる様々な支援活動に活用させていただきます。
2. 使用済み切手・書き損じ官製ハガキ・不要になった音楽CDのご提供
3. 読み合わせボランティアの募集
4. 視覚障害者支援総合センターを支える会の会員募集
 - ・支える会は、センターが行う事業及び視覚障害者の福祉向上のための活動助成を行うものです。会費は1口5千円となっています。会員の方には、機関誌「支援センターだより」をお送りしています。

発刊にあたって

社会福祉法人

視覚障害者支援総合センター

理事長 高橋 實

視覚障害者支援総合センターでは、2009年春より“日本点字の父”石川倉次（1859年2月28日～1944年12月23日）の生誕150年を記念して、「点字」をテーマとしたエッセイを公募しました。ケージーエス株式会社の協賛により行なっている公募企画は2回目となります。昨年はルイ・ブライユの生誕200年を記念した論文・エッセイを公募し、総数52編のご応募をいただきました。

今年は25作品のご応募があり、これを樽松武男氏（ケージーエス株式会社代表取締役社長）と私で予備選考を行ない、検討の結果、13編を審査委員長の三田誠広氏（日本文藝家協会副理事長）にお送りし、審査を仰ぎました。

本書は、予備選考において啓発面で、あるいは記念として「是非ともたくさんの方にお読みいただきたい」として委員長にお送りした13編を1冊にまとめたものです。

これは主催者として大変喜ばしく、皆さまに感謝申し上げなければなりません。今回の応募作品を読んでおりましたところ前年度よりも筆者の方のおかれている立場にバリエーションが加わ

り、多種多様な点字との関わり方、点字への思い入れが綴られていることに気付かされました。審査委員長の三田先生は総評において以下のように述べられています。

先天的な障害者はもちろん、中途失明者、教員、さらに母親など、点字との関わり方はさまざまだが、それぞれに切実な事情があって点字に関わり、学ぶ苦勞があり、苦勞を克服した先に大きな喜びがあることは共通している。点字があることによって、人生そのものが充実した輝かしいものになるということが、それぞれの作品を通じて、鮮やかなイメージとなって伝わってくる。

本書に収めた13編の作品に触れていただければ、様々な人生を照らし出す点字の力を知ることができると思います。

また、本書の後半には日本点字委員会顧問の阿佐博先生に、石川倉次の生涯と業績についてご執筆いただいた「初期盲教育の周辺と石川倉次」を掲載しました。

石川倉次の業績を世に紹介する書籍としては、先の時代に出版されたもののほとんどが専門家向けであったり、あるいは児童・生徒向けであったりするものでしたから、改めて点字専門家の視点から石川倉次の人物像とその業績を再評価し、それを分かりやすく伝えることのできる読み物を目指しておりました。

日本に点字のプロフェッショナルが数多しと言えど、「これを執筆できるのは阿佐先生だけだ」と決心するまでに、多くの時間を要し

ませんでした。

数カ月後、私の手元に届いたのが本書に収めた作品です。

石川倉次の人となりは勿論のこと、点字以前の盲教育、アメリカの点字戦争、そして彼なしに日本点字は成しえなかった小西信八と石川との交わりといった、およそ日本点字翻案にまつわる背景が概括的に一望できるような作品です。

生前に3回ほど石川倉次に会ったことがあるという阿佐博先生と、本編執筆後、お会いしてきました。そこで、阿佐先生は

「ルイ・ブライユは天才だが、石川倉次は優秀な教員ですよ」と、語られました。

私たちは、偉人を評価するときに、その業績だけに思わず注目がいきがちです。時代が離れてしまうほど、その傾向が強まるような気がします。

ただ、阿佐先生の作品を読み、そしてこの言葉を聞いたとき、日本点字が1人の天才の閃きによって作られたものではなく、石川倉次に代表される先人たちの努力の結晶なのだという事実打たれ、1人の人間として、石川氏に親しみを感じ、一層強く点字に慈しみを持ちました。

ルイ・ブライユ生誕200年、石川倉次生誕150年、そして2010年は日本点字制定から120年を迎えます。私たちは、過去を見つめ、それを未来へとつないでいくために、今、何をすべきなのか。皆さまにとって本書が、そのヒントを見つけるための1冊としてご活用いただけるならば、これ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、取材にご協力いただきました筑波大学附属
視覚特別支援学校および本書の出版をご助成くださいましたケー
ーエス株式会社、そして作品をご応募くださったたくさんの皆さま
に対し、心より御礼申し上げます。

2009年10月

石川倉次とその時代～点字がつなぐ過去と未来～●目次

発刊にあたって	i
---------	---

石川倉次生誕150年記念エッセイ

点字から教えられたこと 池田 瑛	3
点字から教えられたこと 宇野 繁博	8
点字から教えられたこと 江川 稔	13
私の点字の覚え方・習い方 坂本 高広	20
点字から教えられたこと 白石 優子	25
点字に生きる 田辺 美起	30
点字に生きる 長尾 榮一	34
点字から教えられたこと 額賀 孝子	38
点字に生きる 福井 宏郷	43
点字に生きる～私と点字～ 松倉 ひで	48
点字から教えられたこと 安田 洋子	52
点字の未来を想像する 米倉 美智子	57
点字に生きる 与野 福三	62

初期盲教育の周辺と石川倉次 阿佐 博

はじめに	69
1. その幼少年時代	72
2. ルイ・ブライユとの共通点	73
3. 倉次の教員生活第一歩	73
4. 石川倉次日記	75
5. 教員を天職として	76
6. かなのかい	77
7. 出会い	79
8. 楽善会訓盲啞院	80
9. 三顧の礼	81
10. 楽善会訓盲啞院の教育	83
11. 小西信八の探究	85
12. 石川の8点点字	87
13. 点字戦争	89
14. こだわりすぎた8点点字	93
15. 結実した6点点字	97
16. 点字選定会議	100
17. 拗音の完成	103
18. その後の石川倉次	104

初期盲教育の周辺と 石川倉次

初期盲教育の周辺と石川倉次

阿佐 博

はじめに

今年2009年は点字の考案者、フランスのルイ・ブライユの生誕200年と、その点字の日本語への翻案者石川倉次の生誕150年にあたる年である。ルイ・ブライユに関しては1月4日から8日まで、パリのユネスコ本部で国際点字会議が開催されたのをはじめ、いくつかの国際的催しが行なわれているようだ。わが国ではルイ・ブライユ生誕200年と、石川倉次の生誕150年の両方をあわせて記念するために、各地で色々な催しが計画されている。

それらの催しとは別に、視覚障害者支援総合センターでは、石川倉次生誕150年を記念するエッセイの募集を行なった。それらの中の優秀作品をまとめて出版するにあたり高橋實理事長から、石川倉次の紹介文を書くようにというお話があった。私は石川先生と直接お会いしたこともあり、先輩から色々な話も聞いている。しかしすぐ紹介文が書けるほどの資料は持ち合わせていないので辞退したが、どうしてもということで押し切られてしまった。

考えてみると、今はもう石川先生に直接お会いした人も少なくなってしまったことだろう。私は少なくとも3回以上お会いしている。

第1回目は東京盲学校の中等部に入学したばかりの昭和12年の

ことであった。その頃母校では、11月1日の点字制定記念日の行事として、毎年点字の書き方競技会を行なっていた。石川先生はそれを見に来られたのか、ほかにご用があったのかわからないが、その日、澤田慶治先生とご一緒に私たちの教室に来られたのである。そして澤田先生から点字の翻案者であることが紹介された。個人的には何もお話ししたわけではなかったが、帰り際に私と握手をして、「しっかりやりなさい」と声をかけてくださった。手は固くて何か良く仕事をした人という感じであったが、声は優しかった。

第2回目にお会いしたのは昭和17年の春の頃である。私は師範部に入学した年で、クラスメート5、6名で、先生のお宅を訪問したのであった。2時間ばかり、お相手をしてくださったと思う。そのときは先生が点字の翻案に苦心している頃のお話をしてくださったように記憶している。

第3回目は昭和19年の冬のことで、私はその3月卒業して、岡山の盲学校に赴任することが決まっていた。東京盲学校師範部には「点字練習生」という制度があって、それに選ばれると教科書などの製版や印刷を託されて一定の報酬を受けられることになっていた。私はその「点字練習生」に選ばれていたので、点字の表記法について、特に興味と関心を持っていた。そんな関係もあって、最後にもう1度石川先生のお話を聞いておきたいと思って、1人でお宅をお訪ねしたのであった。先生のお宅は学校から当時の都電で2停留所ほど離れたところにあったのだ。そのときは6点全部を「メ」という文字にしようと考えたのがヒントになって、現在のシステムにたどり

着いたのだということや、滝録松^{たきろくまつ}について長々とお話ししてくださった。

私はそんな思い出や、先輩から聞いた話を思い出しながら書いてみようと思った。しかしそれとともに当時の盲教育の様子も少し記さなければ、点字の持つ意味や、石川先生と盲教育の関係なども理解しにくいだろうと考えた。そこで初期の盲教育周辺のことも不完全ながら追加することにした。

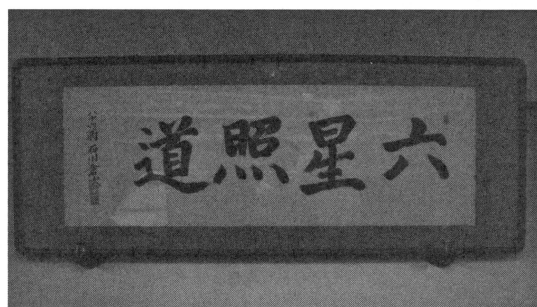
幸い私の手元には、わが国の点字制定70周年を記念して書かれた『石川倉次先生伝』^{すずきりきじ}（鈴木力二著）もある。これが大いに参考になった。

こうしてまとめたのが以下の拙文である。

なお、先生は昭和19年10月に、戦火を逃れて群馬県安中町に疎開されたが、同年12月23日逝去されたのである。享年85歳であった。

2009年 9 月23日

阿佐 博

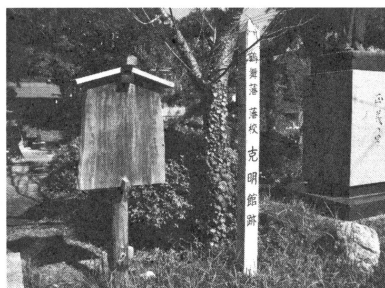


「六星照道」の書

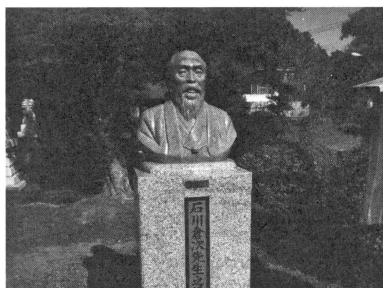
86歳（数え）とあり最晩年のものと伝わる

1. その幼少年時代

石川倉次は1859（安政6）年1月26日に、今日の浜松市において士族の子として誕生した。6、7歳になると、母は自分が読んでいた百人一首や女大学などの読み方を彼に教えたという。8、9歳になると、近所の師匠の家に手習いに行ったり、藩の学問所で漢籍の素読を習ったりした。明治元年、倉次9歳のときお国替えで藩主井上正直に従って、上総（千葉県）上埴生郡小沢村に転居して一時住み、後に市原郡桐木野（現市原市鶴舞）に移った。ここでも明治4年2月から翌年11月まで、再び藩の学問所・克明館で漢学を学んでいる。ところが明治5年、学制が發布され、小学校が開設されたので、彼は学齢期を過ぎていたが、明治6年6月に小学校に入学した。しかし既に色々な学問を修めており、小学校では学ぶことがなかったので、明治8年2月に卒業ということになっている。小学校在籍期間は1年9カ月に過ぎなかった。



鶴舞藩藩校・克明館跡
（市原市鶴舞）



石川倉次胸像
（市原市鶴舞・平成16年作）

2. ルイ・ブライユとの共通点

ルイ・ブライユは1819年10歳のときパリ盲学校に入学した。成績抜群で、1826年彼17歳のとき、生徒として在籍しながら助教という資格を与えられ、下級生に数学や文法を教えている。彼が卒業して正式に見習い教員として採用されたのはその2年後、1828年19歳のときのことであった。

一方倉次は小学校に入学したが、彼の経歴から考えて当然のことながら成績抜群であった。そこで生徒として在籍しながら助教という資格を与えられ、下級生の指導にあたらせられたのである。倉次の場合は既に小学生以上の学力を身に付けていたので、下級生の指導にあたらせられたのは、学校側の苦肉の策だったのかも知れない。しかしいずれにしても、ルイも倉次も、生徒として在籍しながら下級生の指導にあたるという共通の使命を担わされていたのである。点字に深く関わるルイ・ブライユと石川倉次という2人の巨星が、西洋と東洋にあって、その青年時代に同じ使命を担わされていたというのは単なる偶然に過ぎないのであろうか。例え偶然であったとしても、私にはそこに何か意味深い歴史的な必然のようなものが感じられるのである。私はこのような偶然にはいつも感動するのである。

3. 倉次の教員生活第一歩

倉次は明治8年2月に小学校を卒業した。卒業したばかりだったが、同3月に行なわれた教員の検定試験を受けた。そして見事合格

して、「一等授業生」という資格を得たのである。それは当時小学校教員となり得る最低の資格だったが、倉次はその資格を得て、上埴生郡水沼小学校に、読書兼算術習字課教員として勤務することになった。彼17歳の時のことであった。これが彼の小学校教員としての第一歩だった。

しかし希望に燃える青年として、そのような資格を得ただけで満足し得るはずはない。倉次も上級への道を求めて、明治9年には、小学校教員の講習を受けて、「小学四等准訓導」という資格を得るのである。しかしこの資格を得ても水沼小学校の読書兼習字算術の担当という身分は変わらなかった。それまでの待遇は月給6円であったが、このとき月給8円の辞令をもらっている。

しかし倉次は、いつまでも小学校教員を続けようとは考えていなかった。雄飛のチャンスを狙っていたのである。だがそのチャンスはなかなか訪れなかった。我慢し切れなくなった彼は、明治10年9月に辞表を出して、新聞記者になることを夢見て、田中という友人に誘われるままに東京へ出た。

そのときのエピソードが残っている。知人宅を訪ね四方山の話をしていて昼時になったから宿屋へ帰った。すぐに食事をしようと思い女中に頼んだが食事はないのでお弁当を取りましょうかと聞かれた。仕方がないから弁当をとってもらったというのである。宿屋では昼食を出さないことを知らなかったのである。彼はその日の日記に「このこと奇に思えり。宿屋において昼飯を出さざるを知らざればなり」と記している。

倉次はまだそれほど純朴な青年だったのである。知人宅で四方山の話をしたというのも、おそらく就職の依頼をしていたのであろう。しかしそれ以上に頼るべき人もなく、希望する職を得ることもできなかった。せっかくの上京も徒労に終わったのである。夢破れて倉次は故郷に引き返すほかなかった。そこで熟考の末「自分の進むべき道は教員以外にはない」と決意するのである。正規の教員になるためには師範学校で学ばなければならない。彼は明治11年、千葉師範学校の入学試験を受けることにした。当時の師範学校は四年課程であったが、入学試験の成績によってそれぞれの学年に振り分けられるという方式がとられていたらしく、倉次は第3学年へと編入が認められた。そして明治11年1月26日に入学したのだった。

4. 石川倉次日記

こうして師範学校に入学してみたが、そこでの生活も彼にとっては退屈なものだった。師範学校も開設早々のことで、学習環境もまだ整っていなかったのであろう。1月26日に入学して、悶々としながら約1カ月を過ごし、3月1日を迎えるのである。

この日、彼は早朝に起き出で、身を清め、衣服を改めて机の前に座した。そして師範学校入学以来の1カ月余の生活を省みたのであった。彼はノートを開き「1月26日、ここに入学してより1カ月余、これと覚えしものはひとつなく、知りたる何もなし。これ怠惰の為すところなり。この病を除かずば、この学校に何年いるも無益なり」としたためた。そして他人はどうあろうとも、自分は独力でも勉強

しなければならぬと決意するのである。

その前提条件として、彼は日記をつけることを考えた。克明に日記をつければそれが反省材料となって、自らの怠惰な生き方を変えることができるだろうと考えたのである。彼が60年余にわたって日記を書き続け、膨大な石川日記を遺した端緒は正にここにあったのである。

この日を境にして彼の人生は変わった。正に人生の転換期というべきで、彼の猛勉強が始まったのである。彼は幼い日、藩の学問所などで学んで、漢学の素養があった。それを基にして、国語、国字の研究に打ち込むことになるのである。しかもそれは独り善がりの勉強ではなくて、進んでその種の講習会や研修会にも出席して研鑽を積んだのである。後述する「かなのかい」への出席などもその一環と思われる。

5. 教員を天職として

彼は明治12年6月、師範学校を卒業した。卒業後直ちに小学校訓導として赴任し、いくつかの小学校で勤務することになるが、中でも卒業後1年を経て、明治13年9月に奉職した浜田小学校（現在の幕張小学校）は倉次にとって忘れることのできない思い出の多いところとなった。彼は本校に5年間在職し、校長事務取扱も命ぜられている。私的にはさの夫人と結婚し、長男を得たのもその間であった。師範学校を卒業して5、6年といえば、教育にも一応の見識と自信の持てる時期であり、家庭的にも恵まれて、研鑽に熱中できる

ときであり、しっかりと人生の基礎を築いた時期でもあったのである。この頃の日記に「1、2の同僚とともに、常に200名内外の生徒を教育し、もって豊かならざるも格別困らざるほどの生計を営みつつ日を費やせり」と記している。人生にも学問にも自信を持った時代であったことが想像される。

余談になるが、私が関係している点訳講習会の受講生に、幕張小学校の卒業生がいた。学校には歴代校長の写真を飾ってあるとのことで、石川倉次の写真があるかどうか調べてもらったが、見あたらないとのことであった。何しろ明治10年代のことであり、写真を遺すようなことはまだしていなかったのかも知れない。

6. かなのかい

わが国の歴史を顧みると、遠く平安時代に、女流作家たちによって、かな文字文化の栄えたことはあった。しかし進んだ中国の文化を取り入れるためには、中国の書籍に接しなければならなかった。その接し方のひとつとして我々の先祖は、中国語の発音を無視し、語順を変えて日本語読みにする方法を編み出した。いわゆる訓読である。日本語の文字文化はこのようにして成立していったので、自然に漢字が多く用いられるようになっていった。この傾向は、明治時代を迎えての学校教育にも受け継がれることになるのである。しかしそれは文字の習得にのみ時間と労力を要して、合理的な学習とは言い難いという批判も出るようになっていた。そうした中に、国語改造論として、かな文字論者やローマ字論者なども出現してくる

のである。

ふくざわゆきち 福沢諭吉はその著書『文字之教』もんじのおしえの中で「わが国には仮名文字が存在するにも関わらず、多くの漢字を用いることが習わしになっている。これは不都合なことなので、漢字は次第に廃止するような用意が必要である。その用意とは文章を書くのに、難しい漢字をなるべく用いないように心がけることだ」といった趣旨のことを記している。漢字制限論である。

わが国郵便事業の父と言われ、明治初期の盲教育にも深い理解を示していた前島密まえじまひそかもかな文字論者であった。彼は1866（慶応2）年とくがわよしのぶに、漢字廃止についての建白書を徳川慶喜に提出している。そして明治6年には独力で「まいにちひらがなしんぶん」というかなばかりの新聞の発行にも着手したほどである。

わが国最初の近代的国語辞書『言海』の編纂者として知られるおおつきふみひこ大槻文彦もかな文字論者であった。明治16年には彼を中心にして「かなのかい」が設立されたのである。この会の目的として規則第1条には「わが国の学問の道を容易くせんがために、言葉はなるべく世の人の耳に入りやすきものを選び取り、専ら仮名のみを用いて文章を記する方法を世に広めんとするにあり」と記されている。この会の発足を知って、石川倉次も、小西信八も入会したものと思われる。特に石川倉次は、自分の教育実践の中で、漢字制限の必要性を痛感し、かな文字論者になったものと思われる。

石川倉次が勤務していた明治初年の小学校は四年生であったが、4千に及ぶ漢字を教えることになっていたそうである。だからその

頃は、県下で進んだ小学校といわれるところでも、漢字にのみ力を入れ、理科教育などは殆ど行なわれていなかった。ところが倉次は町の吏員を動かして理科学の器械一式を購入させ、自分の学校ばかりでなく、父兄や近くの学校の生徒までも集めて実験を行ない、理科教育の振興に努めたのである。漢字教育の偏重に警鐘を鳴らし、バランスのとれた教育を行なうことを主張したのである。「かなのかい」の設立を知って、彼が入会したのは自然の成り行きだったと思われる。

7. 出会い

明治17年1月27日、東京虎ノ門の工部大学校において「かなのかい」の研修会が開催された。倉次はこの会に出席するためその前日東京に出てきて友人宅に1泊し、その会に出席した。会場に着いてみると何となく見覚えのある顔があり、それを那珂通世博士な か みちよだと思ったのであった。那珂通世は東洋史研究の学者で、東京高等師範学校の教授であったが、やはりかな文字論者で、かなのかいの有力なメンバーであった。倉次は日頃から尊敬している那珂通世博士だと思って自分の名を名乗り、丁寧に挨拶したのだが、それは人違いで小西信八だったのである。小西の風貌が那珂通世博士に似ていたのであろうか。小西は「那珂先生と間違えられるのは光栄です」と名乗って名刺を出した。倉次赤面の一瞬であった。彼はその日の日記に「既にして那珂先生来たりしと思ひしに、小西信八君にて人違いをしたりしは、誠におかしくまた恥ずかしかりき」と記している。

しかしこうして不思議な出会いをした2人は意気投合したらしく、親しい交わりが始まるのである。

その後倉次は明治18年9月に、茂原小学校に転勤し、一方東京女子高等師範学校教諭で、附属幼稚園の主任でもあった小西は、明治19年1月に楽善会訓盲啞院の主任兼専務として派遣されることになるのである。

8. 楽善会訓盲啞院

明治8年5月22日は、わが国の盲教育にとって忘れることのできない記念すべき日と言わなければならない。なぜなら当時の有識者6人の発起によって、初めて組織的盲教育について論議された日だからである。発起人として名を連ねたのは、古川正雄、津田仙、なかもらまさなお きしだぎんこう 中村正直、岸田吟香、ボルシャルト (Dr. Burchardt)、ヘンリー・フォールズ (Dr. Henry Faulds) であった。

古川正雄は、工部省の役人で、1873 (明治6) 年、ウィーンで開催された万国博覧会に出席して、主として教育方面の調査を行なった人である。工部省とは明治初年の中央官庁の1部門である。津田仙は実業家で、築地でわが国最初のホテルを経営したり、農学校の経営に乗り出したりした人である。福祉の志篤くキリスト教信仰を持ち、中村正直・にいしまじょう 新島襄とともにキリスト教の3傑と言われた1人であり、津田英学塾 (現津田塾大学) の創設者津田梅子の父でもあった。中村正直は私塾を経営し、英語教育に力を注ぎ、多くの英才を送り出した人であり、岸田吟香は実業家として活躍し、他方へホ

ンの和英および英和辞書の編纂にも協力した人である。ボルシャルトはルーテル協会の宣教師であり、ヘンリー・フォールズは、医師でもあり宣教師として来日し、築地病院を開設して診療をしながらキリスト教の布教に努めた人である。

これらの6人が築地のヘンリー・フォールズ宅に会し、盲啞教育を始めるための委員会を組織し、それを「楽善会」と名付けたのであった。

楽善会発足後、その趣旨に賛同して入会協力する者も多く、資金も調って、明治13年に築地に校舎を新築して「楽善会訓盲啞院」と称し、生徒募集を始めた。

こうして民間の手によって盲啞教育が始められたのであるが、明治18年に至り、「民間の経営では永続することはできても発展は期しがたい」との意見が出て、文部省に直轄願いを出すことが決議された。これが認められて、明治18年11月、文部省の直轄学校となったのであった。官立東京盲啞学校の誕生である。しかし校名を「東京盲啞学校」と改名したのは、2年後の明治20年のことであった。この学校に、明治19年1月、小西信八が主任兼専務として派遣されてきたのであった。

9. 三顧の礼

楽善会訓盲啞院が文部省直轄となったとき、従来からの教員は殆どが免職となり、小西が赴任したときには、2人残るのみとなっていた。その手不足を補うため、至急に1人は増員しなければならな

かった。そのとき第1に小西の頭に浮かんだのが石川倉次であった。しかし倉次も茂原小学校に転勤したばかりのときだったのである。

小西が倉次に就任要請の第1信を出した日付は、明治19年1月24日となっている。その第1信には、自分が盲啞教育に従事することになった事情、人手が足りないので至急に1人増員しなければならないこと、その人として倉次以外には考えられないことなどがしたためられている。その一節に「貴兄の熱心と、貴兄の親切と、貴兄の考え深きと、貴兄の向学の心の篤きとに感じ、かかる突然のご相談におよび候。幸いにご承諾くださり候ば、ひとり私の幸せにとどまらず、盲啞の幸福と存じ候」とあり、茂原小学校から優秀な教員を奪うのは心苦しく思うが、是非この願いを聞き入れて自分を助けて欲しいということが切々と述べられている。しかし倉次は、障害児教育については何の経験もなく、考えたことさえなかったし、またあまりにも突然の話だったので、この願いを断ったのであった。

しかし小西は諦めなかった。2月5日付で第2信をしたためている。それには、茂原小学校に転勤したばかりでそちらにも事情はあるだろう、また地方から良い教師を引き上げるのは自分としても好まないところではあるが、助け手の少ない盲啞教育にはどうしても良い人を得なければならない。それには貴兄以外には考えられない。大変申しにくいことだが、もし給料の問題であれば、文部省と交渉して引き上げることもできるし、夫人も裁縫の教師として採用したいから、2人で働いて欲しい。多忙のため文章を考えている暇がないので、失礼なことがあったとすればお許し願いたいという意味の

ことが記され、最後を「ただこれ盲啞のためをはかるのみ、願わくば来たり助けたまえ」と結んでいる。

だが倉次は決心がつかず、この2月5日付の第2信に対する返信を延ばしていた。そこへ小西から2月10日付の第3信が届くのである。それには、「蜀の王劉備は軍師として諸葛孔明を迎えるにあたって、3度も彼の草庵を訪ねている。それは彼の徳と才能を愛したからだ」という故事を引き、自分も貴兄の徳と才能を愛しながら、貴兄を訪ねることもせず手紙のみで横着している。それは君子を迎えるにあたっての道を失するもので、この願いに応じてくれないのもやむを得ないことだが、既に文部当局の係官にも貴兄の名を告げている。係官からも、しきりに貴兄を早く招くようにと督促されている。何か希望があれば腹藏無く言って欲しいが、それでも貴兄がこの話を断るのであれば、自分としても覚悟せざるを得ないという意味のことが記されている。

ここに至って倉次も遂に決意を固めることになり、小西の希望に添いたいという旨の返信を書いた。それを受け取って小西が喜んだことは言うまでもない。そして倉次一家の転居について、住居のことや生活のことなど、細々としたことを書き送っている。こうして倉次は明治19年3月6日に楽善会訓盲啞院へ赴任することになるのである。倉次27歳のときのことであった。

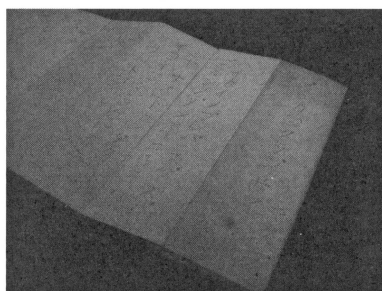
10. 楽善会訓盲啞院の教育

楽善会訓盲啞院の指導項目を見ると、習字、素読、講義、暗唱、

数学、作文、音楽などが挙げられ、それに職業教育として、箏・三味線などの邦楽や、按摩・鍼・灸などが加えられていた。文字としては凸字および針文字が用いられていた。

凸字とは特別の活字を作り、それで用紙の裏面から強く押圧することによって、用紙の表面に文字を浮き出させたものである。1784年、パリに世界最初の盲学校を設立したヴァランタン・アウイの考案したもので、点字考案以前、欧米各国に普及していた。楽善会の凸字はアメリカに学んだもので、楽善会の最初の仕事は、新約聖書『ヨハネ伝』9章の凸字印刷をアメリカの聖書協会に注文したことであった。この注文にあたって、わが国でも凸字印刷を行ないたいというので、印刷用紙も同時に注文している。こうして輸入した凸字を参考に、わが国独特の凸字印刷を開発したのである。

針文字とは、活字の文字の部分を針状にし、凸字同様用紙の裏面から押圧して、用紙表面に点線文字が描かれるように工夫されたものである。1804年にウィーンに盲学校を開設したクラインの考案したものである。楽善会訓盲啞院ではこの2種の文字を採用したのであった。



針文字による石川倉次への手紙

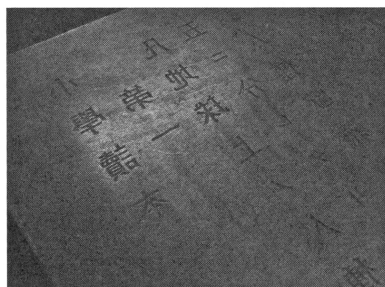
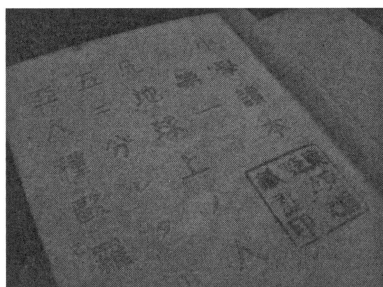
文字指導の方法としては、最初「木刻文字」と称し、板に文字を刻んだものを用いた。それを触読させることによってまず50音の指導を行なうのである。文字の認識ができると、石筆石板を用いて実

際にかな文字を書く練習を行なった。それに上達すれば次第に漢字の練習に入り、偏旁等に進み、鉛筆で紙に書く練習に進んだ。

凸字書として製作されたものには『小学読本』、『詞の掟』(訓盲^{しょうがくとくほん}院の教員だった高津柏樹^{ことば おきて}の著したもので、簡単な文法書)、その他『千字文』や、吾妻琴譜、杉山三部書などもあった。

『千字文』は、よく知られるように、中国の六朝時代に著され、わが国にも輸入されて習字の手本として用いられたものである。漢字の指導にでも使われたのであろうか。

また職業課程として、邦楽や鍼按などの指導も行なわれていたので、吾妻琴譜や杉山三部書は、それらの教科用図書として用いられたのであろう。しかしどの程度読み得たものか、私は疑問に思っている。



凸字教科書『小学読本』と作成用版木

11. 小西信八の探究

小西信八が盲教育界に入って、第1に感じたことは、教育方法の非能率性ということではなかっただろうか。失明者が漢字の凸字を触覚で読む困難さは想像を絶するものがある。かねてよりかな文字

論者として文字改良を志し、健常者にさえかな文字を進めていた小西にとって、それは徒労にも近いものに思われたに違いない。盲教育には失明者自ら書くことができ、また容易に読むことのできる文字がなくてはならない。そう考えて小西の探究が始まるのである。

おそらくあらゆる方面に手を伸ばし、視野を広げたことであろう。
その結果上野にあった教育博物館の館長手島精一てしませいいちとの出会いがあり、小西の希望は実を結ぶことになるのである。

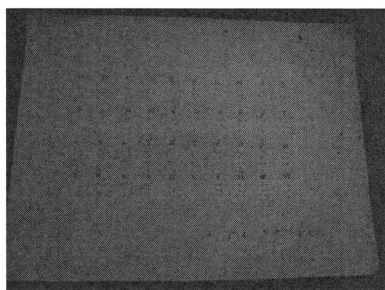
手島は明治9年、フィラデルフィアで開催された万国博覧会に出席し、点字の本などを持ち帰って図書館に所蔵していた。また明治17年にロンドンで開催された教育ならびに衛生博覧会にも出席し、英国製の点字盤や点字書とともに、名著と言われるアーミテージの著書『盲人の教育と職業』も購入して持ち帰り、図書館に所蔵していたのである。また同博物館には、文部省発行の「教育雑誌」のバックナンバーも揃っていた。その第89号（明治12年2月発行）には、
文部省から派遣されてアメリカに留学していた目賀田種太郎めがたねたろうがパーキンス盲学校を視察し、その詳しい報告が掲載されていた。その中には点字の書き方や読み方に関するかなり詳しい記述もあったのだ。教育博物館には近代的盲教育の扉を開く宝が眠っていたのだ。手島精一の援助を得て、この宝庫に分け入ったのが小西信八であった。特に小西を喜ばせたのは点字の存在であった。点字の存在を知った小西は、早速点字盤やアーミテージの著書を借り出し、学校に持ち帰って実験を試みた。当然のことながらアルファベットシステムの点字だったので、国語を表記するにはローマ字綴りにするほか

なかったが、それでも、自ら書き得て、自ら読み得る文字を教えられて、生徒は満面に笑みを称えて喜んだという逸話が伝わっている。

しかし小西はそれで満足することはなかった。1歩を進めて、このシステムでかな文字を表現することを考えたのである。そこに小西の見識を伺うことができる。おそらく自らその研究を進めたいと考えたことであろう。だが小西の日常は多忙に過ぎた。そこで最も信頼し、国語にも造詣の深い石川倉次にその研究を託したのである。明治20年末のことであった。そして倉次はその研究に着手し、心血を注ぐことになるのである。

12. 石川の8点点字

小西が倉次に点字の翻案を委託したとき、その資料として手渡されたものは、ブライユの点字配列表を印刷した紙片1枚であった。縦14cm、横18.2cmの紙片は、今も筑波大学附属視覚特別支援学校の資料室に保存されている。この簡単かつ粗末な紙片1枚が、わが国の点字翻案事業の原動力となったのである。

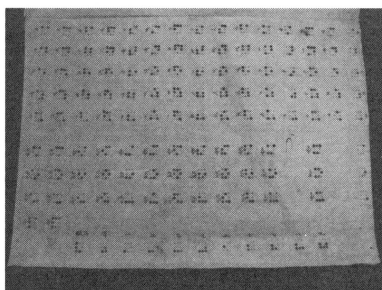
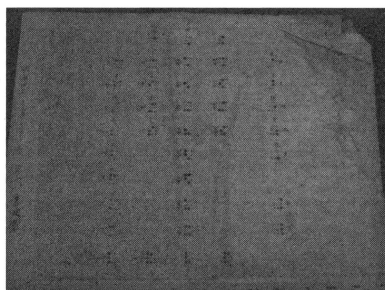


石川に手渡された
ブライユ点字配列表

翻案にあたって倉次が最初に考えたことは、「6点の組み合わせは63通りになるが同型のものを除くと、僅か44通りにしかない。ところがわが国のかなは48文字あり、どうしても4字足りない。だから6点のままでかなの全てを表すことは不可能だ」ということで

あった。同型のものとは、1、2の点は縦2点だし、2、3の点も縦2点となり、形は変わらない。そんな関係のものをいうのである。

不可能となれば点を加える以外に方法はない。倉次は1、4の点の間および3、6の点の間に1点を入れ、縦横3点で、中央の1点の抜けた8点を考えた。この8点でかな48文字を組み立てたのである。これを「石川の8点点字」と言う。この案を時の校長矢田部良吉やたべりょうきちに示したところ、それを生徒に教えて実験してみるようにとの命を受けた。そこで明治21年中頃、浅草の教育品製造会社に命じて、8点の点字盤を作らせ、8点点字が生徒に教えられたのであった。それでも従来の凸字や針文字よりは遙かに読みやすいし、また自ら書くこともできるので、そこにはそれなりの喜びがあった。



石川倉次の8点点字
「明治22年11月14日夜 石川倉次案」との記載がある

だが倉次の心は晴れなかった。足りないのは僅か4文字なのだから、なんとか工夫がありそうなものだと考えたのである。また小西も、8点点字では満足できず、できればブライユ方式そのままの6点で、翻案したいものだと願っていた。大河原欽吾著『點字發達史』おおかわらきんごの中にも次のような記述がある。

然しながら石川氏は格別面白くも感じなかった。何となればブ氏の原器を用いてよき工夫の出来るかも知れず、其の時には折角盲生が学習した点字は無論廃棄せざるを得ず、徒勞に終わるかも知れない。時に小西氏もなるべくはブ氏そのままの6点にて我が仮名を表出したい、という意見であった。石川氏はそれは不可能とは思いつつも、僅かに4字の不足なれば如何にかして我が仮名を適当に表す方案のなきにしもあらざるべしと此に再び考案に専心したのであった。

ここに「ブ氏」という言葉が出てくる。これは当時よく使われた用語で、「ブライユ氏」を略したものである。

13. 点字戦争

「石川の8点点字」が採用され、もしそのままになっていたとすれば、おそらく後年点字戦争を体験しなければならなかっただろうと、私は推測している。それには前例があるからだ。アメリカの点字戦争である。

点字がアメリカに輸入されたのは、1859年あるいは1860年であったと言われている。最初にブライユの点字システムを取り入れたのは、セントルイスのミズーリ盲学校であった。生徒たちは点字の採用を喜び、熱心にその習得に努め、読み書きに上達していった。アメリカにおいても当時はまだ各種の凸字が用いられていたのである。

ニューヨーク盲学校長ウィリアム・ウエイトは、凸字に熟練した

者と、点字に熟練したものの読み速度について比較検討を試みた。その結果、点字に熟練した者が、読みスピードにおいて遙かに優れていることが分かった。

そこで、ウエイトもニューヨーク盲学校に点字を取り入れることにした。しかし、ブライユのシステムを検討するうちに、2つの欠点に気付いた。

その1は、一般の文章における文字の出現頻度と、その文字を構成する点の数についてである。例えばkとtを比較した場合、tの方がkよりも遙かに出現頻度が高いにも関わらず、kが2点より構成されるのに対して、tはその2倍の4点からなり、読み書きの労力の上からいっても、それは不合理だと考えたのである。当時は点筆で1点1点書く以外に方法がなかったので、そのような理由も理解できなくてはなかったと思われる。

その2は、紙面における文字の占有面積である。ブライユシステムでは1文字の枠が決まっているので、1点からなるaも5点からなるqやyも同一の面積を占めることになる。それは不合理だというのである。

そこでウエイトは、ブライユのシステムを変更して、点の配列を縦2点、横4点とし、出現頻度に応じて、その文字に割り当てる点の数も調整し、また1文字の占める占有面積の増減を図るために、横は1点ないし4点に伸縮可能な形に改めたのである。従ってブライユシステムとは全く異なった形式の点字ができあがったのであった。彼はこれにニューヨークポイント (New York Point) と名付

けた。ウエイトがニューヨークポイントを発表したのは1868年のことであった。

ウエイトは自ら開発したニューヨークポイントの宣伝と普及に熱心であった。資金を集めて、ルイスヴィルの連合印刷所を占拠して、ニューヨークポイントにより大量の印刷を行ない、それを要求する諸学校には無料で提供した。しかし、本来この連合印刷所は、各学校の要求に応じて、どのような形式の書籍でも出版する建前であったから、やがてこのようなウエイトの横暴な振る舞いに対して抵抗する者も現れるに至った。パーキンス盲学校の創設者ハウおよびその後継者アナグノスである。彼らはニューヨークポイントに強く抵抗した。しかしアナグノスもまた過ちを犯したのである。抵抗の印として、彼もまた、部下のスミスに、ニューヨークポイントに対抗するシステムの開発を依頼したのである。

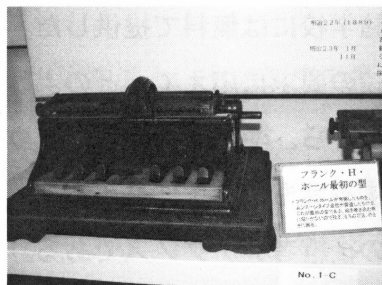
スミスは縦3点、横2点というブライユの原型を保ちながら、出現頻度の高い文字は少ない点で構成するように配慮して、アルファベットを組み替えたのである。結果はブライユのシステムに似たものになったが、似て非なるものであって、しかもこれにアメリカンブレイル（American Braille）という名称を与えたのである。

かくしてアメリカでは、ニューヨークポイント、アメリカンブレイルおよびブライユシステムという3形式の点字が流通することになり、混乱を深めていったのであった。この混乱を一般に「点字戦争」と呼んでいるのである。

しかしやがて1人の人物の登場によって、この戦争にも終止符が

打たれることになった。1890年、イリノイ盲学校長として招聘されたホールである。彼は旺盛な研究心とともに、発明の才にも長けていた。就任間もなく、点字を容易かつ敏速に書く方法についての研究に着手したのである。そして1892年、就任後2年にして点字タイプライターの開発に成功した。

彼の開発したタイプライターは、今日も使われているもので、6個のキーを有し、それらのキーのいくつかを同時に押すことによって、1字を打ち出すことができた。だから1点からなる文字も、5点からなる文字も、ほとんど等しい労力とスピードで打ち出すことができるようになったのである。つまり、ウエイトなどがブライユシステムの欠点として指摘した文字の出現頻度と、その文字を構成する点の数との関係は、あまり考える必要がなくなったのである。こうなればニューヨークポイントも、アメリカンブレールも、その存在価値の大半を失うことになる。



ホールのタイプライター

自意識の強かったウエイトは、このホールの成功を傍観するに忍びなかった。これに対抗して、彼もまたニューヨークポイント用のタイプライターの開発を試みたが、左右の伸縮を自由にするということを機械的に実現するのは容易なことではなかった。仮に実現したとしても、それは非常に複雑な構造となり、とてもホールの簡単なシステムに太刀打ちできるものではなかった。結局ニューヨーク

ポイント用のタイプライターの開発は諦めざるを得なかったのである。このような形で、アメリカでも徐々にブライユシステムによる6点点字が定着していくことになったのである。しかし当時既にニューヨークポイントやアメリカンブレイルで生活している者も多く、またそれらの形式による点字出版物も大量に存在したので、その統一には時間を要した。そればかりではなく、ユーザーの多くがブライユシステムに切り替えなくてはならなかったので、大きい犠牲を払わなければならなかったのである。

私は「石川の8点点字」を思うとき、いつもアメリカの点字戦争を想起するのである。もしあのとき8点点字が採用されていたなら、後年誰かによって必ず6点点字による翻案が行なわれ、アメリカの二の舞を演じたことと思うのである。

14. こだわりすぎた8点点字

8点点字は実験が試みられたのみで、幸いにも実用の段階には至らなかった。倉次はその後ずっと考え続けたが、良い案を得ることができなかった。石川日記に点字に関する記載が現れるのは、8点点字実験の1年後で、明治22年10月31日のことである。この日の日記に「この夜点字を考う。まずよろしと思うものを得たり。12時半いねぬ」とある。何か新しいヒントを得たものと思われる。

倉次は研究の過程において、おそらく生徒たちに協力を求めて実験も試みたことであろう。また、同僚間の話題にも上ったことと思われる。小西は点字の翻案について、教員も生徒も協力するように

呼びかけていた。そこでこの問題は、教員間、生徒間を問わず、校内で最大の話題になったことが想像される。だから教員や、生徒たちの中にもこの研究に加わる者があり、また明治22年6月に赴任した遠山邦太郎も力を添えることになった。遠山も千葉県の人で、浜田小学校に倉次の同僚として勤めた時期もあり、倉次とは親しい仲であった。倉次の推薦によって東京盲啞学校に奉職することになったのである。倉次は同志を得て心機一転、研究に熱中したが、なかなか良い工夫が生まれず、虚しく時日を費やしていた。

こうした状況の中で、教員の中にも、生徒の中にも具体的に自らの案を出す者が現れた。倉次には小西から託されたという重い責任があったが、他の者はそんな責任などを感じることもなく、いわばゲーム感覚で、思いつくままを発表したものと思われる。実は明治22年の暮れ頃、6点点字の案が出ていたのである。遠山案と、生徒の伊藤・室井共同案である。

前述のように、作業の元になったのはブライユの点字配列表である。63通りになる6点の組み合わせを7段に配列したのが、ブライユの点字配列表だ。ブライユ自身もこの配列表を元にして、各種の記号を工夫していったのであった。

ブライユの点字配列表

⠠	⠡	⠢	⠣	⠤	⠥	⠦	⠧	⠨	⠩
⠪	⠫	⠬	⠭	⠮	⠯	⠰	⠱	⠲	⠳
⠴	⠵	⠶	⠷	⠸	⠹	⠺	⠻	⠼	⠽
⠿	⠰	⠱	⠲	⠳	⠴	⠵	⠶	⠷	⠸
⠹	⠺	⠻	⠼	⠽	⠾	⠿	⠰	⠱	⠲
⠳	⠴	⠵	⠶	⠷	⠸	⠹	⠺	⠻	⠼
⠽	⠿	⠰	⠱	⠲	⠳	⠴	⠵	⠶	⠷

伊藤・室井案はまことに単純で、このブライユの配列表の1段目をア列、2段目をイ列というように、1段目から5段目に五十音を配当したのみのものであった。

遠山案もこれに近いものではあったが、少し工夫が加えられており、次のようになっている。

(1) ブライユの配列表の1段目の10字を50音図のア段に配当する。ただし8番目と9番目を入れ替える。

(2) 配列表の2段、3段、4段のそれぞれを、50音図のイ段、ウ段、エ段に配当する。ただし3段のヤ行とラ行とを入れ替える。

(3) オ段の文字は、全てア段の文字を低下して、これに4の点を加える。ただし「口」の1字だけ変則としてラ下がり(2、6の点)にする。

(4) ンはオ下がり(3、5)の点、ヲには、現在の数符を用いた。そしてワ行の「ヰ」と「ヱ」は省いた。

このとき、倉次も思い切って6点に切り替えて工夫をすればもっと早く成案を得ていたかも知れない。しかしなぜか倉次は8点にこだわっていた。既に8点の点字盤を製作していたことが災いしたのかも知れない。

明治23年4月29日の石川案というのがある。これは倉次が最初に発表し矢田部校長に示した案とは幾分異なっているが、やはり3点四方の8点式から抜け出ていない。しかし努力を重ねたことは事実で4月14日の日記に「今夜点字を考えて、2時を聞き、急ぎいぬ」とある。夜半過ぎまで考え続けていたのであろう。

しかし工夫に行き詰まったとみえて、5月27日案では、縦4点、横2点の8点に切り替えている。倉次は3点四方の点字で約2年研究してきたが、遂に成案は得られず、ここへきて縦4点型の8点に切り替えざるを得なかったものと思われる。それでもなお8点に固執し続けたのはなぜだろう。私には理解の及ばないところであるが、8点の提唱者として、やはり自らの意志を貫きたかったのであろうか。

いとうぶんきち

生徒の伊藤文吉は、優れた才能の持ち主らしく、様々の案を出しているが、5月末からは彼の案も縦4点、横2点の8点点字になっ

ている。

同23年6月には、生徒の室井案や、遠山案などが出されているが、これらも縦4点の8点点字になっている。やはり倉次が中心で、周辺の人々は、その後を追っていたことがわかる。

15. 結実した6点点字

明治23年7月20日石川案というのがあるが、これはまだ8点式になっている。ところが7月22日に至り、倉次は突然6点式に切り替えているのである。何か新しい考えが浮かんだのであろう。しかし、実際の案の上には新しさは感ぜられず、配列表の1段から4段までにア列からエ列までをあて、オ列を変則にしたものであり、22年暮れの遠山案より優れたものとはいえないものであった。この方式で熟語9つを書いて試しているが、満足はできなかったようだ。熟語を記した後に、「工夫窮屈の跡あるを免れず」と記している。

そこで彼は、22年暮れの遠山案は、ブライユの配列表の一部を変更しているが、変更するなら一部ではなくて、全面的に変更してかなに適するものにしたいと考えた。そしてこの考えに従って、めまぐるしく改正を重ねていった。

石川案の跡をたどってみると、7月31日案、8月10日案、同12日案、同18日案、同21日案、同23日案、同27日案というように次々と新しい案を出している。6点に切り替えて、集中的に工夫を重ねていったことがわかる。

その間に8月14日および同18日遠山案というのがあるが、これも

6点式になっており、この頃になると、関係者一同が、やはり倉次に従ってブライユの6点点字で翻案することに傾いていることがわかる。

倉次はこの8月27日案に至り、ようやくひとつの新しい着想を得ている。ア行には配列表の1段の文字を使い、ワ行にはその低下文字を使おうという発想である。ワ行がア行と同型であっても、文章にした場合、隣の文字との上下の位置関係によって明らかに区別できることに気付いたのである。この着想によって、倉次が最初に考えた、「6点の組み合わせ44でかな文字48を表すことはできない」という考えは払拭されたことになる。それと同時に、この日重大な決意をしている。点字は目に障害のある者の文字だから、6点全部を“メ”という音を表すものにしたいと考えたのである。配列表1段目の10字の中に、5の点を使用していないものが5字あり、6番目の“エ”に3、5、6の点を加えると6点全部を使用することになる。これを“メ”と決めたのである。次いで配列表1段目から3、5、6の点を加え得るものを抜き出すと、「アイウエオ」の5文字だから、これをア行と定めた。こうしてまずア行とマ行が決定したのであった。ワ行はア行の低下文字を使用することも決めていたので、自然にワ行が決定されたことにもなった。

かな文字論者であり、ローマ字論者でもあった倉次にとって、マ行の完成は大きい意味を持っていた。つまりア行の母音に対し、3、5、6の点は子音と考えられるということである。3、5、6の点の組み合わせには7通りあり、それを子音と考えればカ行からラ行

までの7行を作ることができる。残りは変則的なヤ行のみである。
ここで遠山案が生きた。ア行の低下文字に4の点を加えることによ
って、ヤ行もできたのである。

しかし子音をどの点にするか、これについても深く考えなければ
ならなかった。それから8月31日案、9月5日案、9月21日案と
続くのであるが、8月31日案には、工夫のための方針が次のように
記されている。

第一 読み易き様

誤なく早く続け得る様、
似たる符ハ成るべく少き様

第二 書き易き様

用多き字ハ点数少くして 早く音を表し得る様、

第三 覚え易き様

覚え書の規則ある様、規則混雑せぬ様、
五十音順に並べて音韻合成の規則を知り易く
変則字は成るべく少き様。

第四 成るべく多くの音を自由に表し得る様

日本の仮名ノ数ダケハナクテハナラヌ。

第五 五十音に並べて観よき様

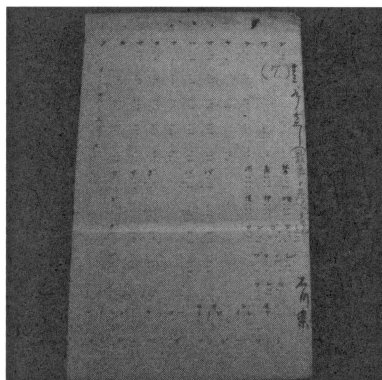
詞を綴りても観よき様。

この方針に従って点の配列を考え、9月21日案で最終案となるの

である。しかし9月21日案では濁点が4の点、半濁点が5の点となっており、このことに関しては選定会議の行なわれる前日まで迷っていたようである。しかし選定会議には、濁点を5の点、半濁点を6の点として提出している。

16. 点字選定会議

倉次は2年余の間8点点字に固執していたが、明治23年8月に至り、俄然研究の対象を6点点字に切り替えた。それが良かったのだ。6点に切り替えると、次々と名案が浮かび、1カ月余にして成案を得ることになったのである。



石川倉次 最良の案

6点案に関しては、遠山案や伊藤案、室井案なども発表されている。そこでいずれを採用するか協議を行なうことになった。いわゆる“点字選定会議”である。

なお遠山案に関しては、明治22年暮れの案の他に、明治23年8月14日および18日案というのがある。選定会議に提出されたのがどの案であったか定かではない。石川案が採用されたのだから、大きい問題にはならないが、その内容も知りたい気がする。

むろいまごしろ

伊藤・室井案は、伊藤文吉、室井孫四郎それぞれ単独に案を持っていたが、最後に両案を共同案としてまとめたものである。これは配列表の1段目から5段目までに五十音を配当したもので、明治22

年暮れの案と考えていいようだ。

選定会議においては以上の3案について協議が行なわれた。なお倉次はこの点字選定会議に先立って、点字に必要な諸条件を挙げ、“点字選定要旨”として発表している。彼が8月31日案に翻案にあたっての心構えとして記したものをまとめたものと思われ、次のように簡明になっている。

- 第一 誤りなく早く読み得べし。なるべく類似の符を少なくすべし。
- 第二 速く書き得べし、点数少なき符を常用多き字に充つべし。
- 第三 記憶に便なるを要す。
- 第四 現行の仮名の数だけは点字を以て表わし得るを要す。
- 第五 五十音に並べても詞を綴りても見悪からざるべし。
- 第六 数冠詞は最も知り易きを要す。

このような経過を経て、9月27日に点字選定会議が開かれたのであった。出席者は、伊沢修二校長をはじめ、小西信八、石川倉次、遠山邦太郎、奥村三策おくむらさんさくの4教員と、8人の学生たちであった。

この会議において、奥村氏は最も単純な伊藤・室井案を推し、伊沢・小西両氏も「盲人が良いと言うのだから」という理由でこの案を支持した。しかし理論派の倉次と遠山はこれに強く反対した。その論拠は、上下の関係はあっても、ア段とオ段が同型になって、読み誤りの恐れのあること、および文に綴った際、凹凸があって見難

いということであった。かくしてこの日は結論を得ることができなかった。

第2回選定会議は10月4日に開かれたが、この日も結論を得ることはできなかった。この日の収穫は、濁点や半濁点は清音の前に置くという原則を決定したことである。

第3回選定会議は10月18日に行なわれた。この日も結論には至らなかったが、数字はブライユシステムそのままを用いること、および表記について、語と語との間は1マスあけ、句と句の間は2マスあけるという分かち書きの原則を決定し、さらに助詞の「ヲ」はワ行のオを用いることをも決定したのであった。

そして11月1日、最後の第4回選定会議を迎えるのである。この会議において遂に満場一致で石川案が決定された。石川案は音韻の上より見ても、学習の容易なことから見ても、紙面の経済の上から見ても優れているというのがその論拠であった。

この選定会の特徴は、学生をも交えた会であったということである。4回行なわれた会議の全てに、小西、石川、遠山、奥村の4教員とともに、多少の増減はあったが、毎回8名ないし10名の学生が加わっていた。原案も前記のように教員側からばかりでなく、学生側からも出されており、教員も学生も同じ立場で意見を交換しあったのである。しかも全員の意見が一致するまで討議を重ねたのであった。正に民主的な運営が行なわれたのである。この民主的運営は、わが国の点字史上誇っても良いことだと私は考えている。

17. 拗音の完成

点字翻案当時は歴史的仮名遣いが行なわれていたので、拗音も清音や濁音の仮名遣いによって表現されていた。今日を「けふ」と書き、ドジョウを「どぜう」と書くような仮名遣いである。しかしローマ字論者でもあった倉次は最も望ましいのは表音的仮名遣いであると考えて研究を続け、遂に拗音システムを完成したのである。それは4の点を拗音点として、力行とかサ行とかその他の行の文字に前置するという方法で、実に画期的な発想であった。私はこの拗音点の4の点は、ローマ字綴りにおけるyの意味を持たせたものだと考えている。例えば五十音における力行の6の点がkを表すものだとすれば、「カ」は「ア」という母音のaにkを加えたことになり、kaと考えられる。さらにそれにyにあたる4の点を前置した形で、「キャ」はaとkとyを含みkyaと考えることができるのである。また五十音の構成において、ヤ行に4の点を用いたが、その場合の4の点にもyの意味を持たせていたとも考えられるのである。

拗音システムが発表されたのは明治31年2月15日のことであったが、最初この拗音の採用には抵抗する者が多かった。点字翻案以来約8年、点字使用者も歴史的仮名遣いに慣れ親しんでいたからである。しかし次第にその利便性が認識され、ついに明治32年7月6日、東京盲啞学校ではこれを公認し、採用することを決定した。

これら五十音および拗音は、明治34年4月22日、官報学事欄内小西信八校長報告に「日本訓盲点字」として掲載された。従ってわが国の「点字制定記念日」は本来なら4月22日というべきかも知れな

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

■著者紹介（「初期盲教育の周辺と石川倉次」）

阿佐 博（あさ ひろし）

1922年徳島県生まれ。5歳のとき外傷にて失明。1944年官立東京盲学校（現在の筑波大学附属視覚特別支援学校）師範部卒業後、岡山県立盲学校を経て、1947年から官立東京盲学校に勤務。1984年の定年退職まで同校（筑波大学附属盲学校）に教諭として従事。1955年より、日本点字研究会、日本点字委員会委員として点字表記法の確立に専心し、1990年には同委員会会長に就任。現在は同委員会顧問を務める。

主な著書：『中村京太郎一目を閉じて見るもの』（日本盲人福祉研究会）、『日本点字100年の歩み』（日本点字委員会）、『主の枝枝として』（日本基督教団出版局）、『点字のレッスン』『ルイ・ブライユ生誕200年記念作品集／点字エクササイズ63』（以上、視覚障害者支援総合センター）

■資料・写真提供：筑波大学附属視覚特別支援学校

石川倉次とその時代 ～点字がつなぐ過去と未来～

定 価 1,200円（＋税）

2009年11月 1 日 初版発行

監 修 高橋 實

編集・発行 社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター

〒167-0043 東京都杉並区上荻 2 丁目37番10号 Keiビル

TEL 03-5310-5051 FAX 03-5310-5053

<http://www.siencenter.or.jp/> mail@siencenter.or.jp

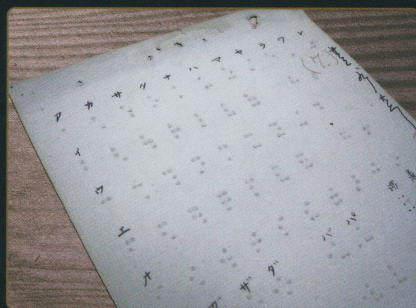
郵便振替口座 00110-4-576094

印刷・製本 タナカ印刷株式会社

〒104-0031 東京都中央区京橋 3 丁目12番 4 号

TEL 03-3567-2551 FAX 03-3564-2920

本書に掲載の画像・写真の無断転載複製を一切禁じます。



社会福祉法人
視覚障害者支援総合センター